標本(久崎産)にもとづいて命名されたものである。

ところで、久崎は蝶の宝庫というに相応しい。昭和9年私は佐用川沿いに広がったナラガシワ林に分けいって新種とおぼしき蝶を得、同28年その詳細を記録した。これが今日ヒロオビミドリシジミと呼ばれる珍種なのである。

明治34～35年頃の〝博物之友〟を繙くと、しばしば福田氏(後の駒井卓博士)の名が見うけられ、姫路周辺での氏の活躍ぶりがうかがえる。なかでも明治35年揖保郡竜野町で手にされたキマダラルリツバメは岐阜県に次ぐもので、広く世の注目を惹きつけた。福田氏は明治36年姫路中学校を卒業された方であり、この発見も氏が在学中の業績であったわけである。

また、記録によると明治34年東郷隆次氏は神崎郡船津村でモンキアゲハを採集されている。今ではさほど珍しいものとは云えないが当時は南方系のこの蝶が本州にいるかどうかが疑われ、一部に話題を呼んだこともあり、船津村はその後に得られた姫路市下寺町とともに本州で数少ない産地の一つとなっていた。

このように西播地方における昆虫相の研究は歴史が古く、由緒深いものがある。これは姫路以西の地がこうした面で進んでおった証左であるといってよい。ここに私どもは先輩諸兄の後を継ぎ、この地の昆虫相をより明らかにするために精進すべきでなかろうか。

会の門出にあたって駄弁を労し、さらに今後の発展を祈りたい。

「読者の目」

神戸新聞社　大谷記者

たいがい帰宅するのは子供たちが寝てしまった時間なのだが、まくら元に紙箱が並んでいて、踏みつけないように気をつけなければならない。一度、いっぱいきげんの千鳥足で箱をけとばしたら、足の指にチクリときた。団地の周りで集めたハナムグリが十数匹はいっていたのだ。

いま、小学二年生と幼稚園の息子が飼っているのは、キアゲハの幼虫三匹、カラスアゲハの幼虫が五匹、カイコ八匹、デメキン一匹カブトムシ二つがい、ブンチョウ一羽、アメリカザリガニ一匹、オタマジャクシ十数匹。それに、トカゲやカエルが出入りしているが、友だちと交換することが多く、一定していない。幼稚園の息子は、メンコ五枚でアオガエル一匹を手に入れてきていた。

子供たちにとって、これらの生き物は、メンコやミニカーなどと同じおもちゃの延長線上にあるようだ。いっしょに遊べる仲間であり、おもしろい動きを見せてくれる友だちと思っているらしい。しかし、アゲハの幼虫がサナギになり、木の枝のサナギは灰色、ミカンの葉のは緑色、ビンの壁のは白っぽい色に変わっているのを発見したとき『どうして違うのだろう』『チョウになっても一匹ずつ色が違うのかな』といいだした。

残念ながら、私は子供たちにうまく説明してやれる知識を持っていない。少年時代、網を持って駆け回ったことがあったが、いまから思えば、きれいなおもちゃを集める競争に夢中になっていただけで、チョウを通じて自然を知るのではなく、自然からチョウをもぎとっていたのだった。

昨年の夏、いっしょに仕事をしている仲間が、播磨のあちこちを訪ねて昆虫の生きているようすを観察、写真とともに連載した。ヒメハルゼミの脱皮の瞬間、ハッチョウトンボの交尾のありさまなど珍しいと思えるものから、カマキリ、カメムシなどだれでも知っ

ている昆虫も含めて紹介したのだったが、取材に苦労したのは、ナナフシやオトシブミなどより、テントウムシやアメンボの方だったという。どこにでもいると思っていたら意外に見つからず、捜しているうちに取材の時間がなくなってしまったというのだ。

『ありふれていると思っていた昆虫が姿を消している。自然の減少、というのか、ぼくらの生活環境の変化がしみじみわかった』と、担当記者はため息をついていたが、このような自然破壊をどう考えたらいいのだろうか。おそらく、多くの人たちが同じようにため息をついていることと思うが、こうした思いを集め、データで裏打ちし、自然を守る運動の世話をするグループが生まれれば、私たちは教えられるところが多く、さらに踏み込んだ記事を書くことができると思う。

そしてまた、いま子供たちがおもちゃとして付き合っている生き物を、人間の仲間として見るようになるためには、これからさまざまな自然を理解していく過程が必要になってくる。小さな生き物と、心おどる出会いを繰り返していってほしいと思う。そういう世話をしたり、機会をつくったりするグループが生まれたことはとても重要なことで、私たちはすばらしい人たちと知り合えたと喜んでいる。

〝県下のFavoniusについて〟

（オオミドリシジミ属）

岩村　厳

6月の声を聞くと、どうしても一度はその姿をみたくて出かけるものにFavonius がある。朝な夕なにあの金属様の青緑色の翅をきらきらさせて、食樹のまわりをとびまわっている姿は実に美しいものであり、このような生物を創造した自然に感謝したい気持になる。

もう20年以上もむかしになるが、私が蝶に興味をもち、図鑑等を通じてZephyrus とよばれる美しいシジミチョウの一群がわが国にすんでいることを知り、近くのクヌギ林で初めてオオミドリシジミを手にした時のあの感激は今も鮮明に私の脳裏に残っている。それ以来、シーズンになれば県下のあちこちへ、これらグループの姿を求めて10mにもなる長い竿をかついで出かけるのが私の年中行事の一つになってしまった。現在、私の標本箱には、オオミドリシジミ以外にも、これらミドリシジミ属のグループの蝶がかなりおさまっているが、その個体数と種類数が次第に増すに比例して、県下の色々な所で、これらの蝶がその生活をおくっていることも明らかになって来たのである。

現在、兵庫県下には、日本産Favonius6種の内、クヌギ、コナラ等の林のある所であればたいがいその姿を見うけられるオオミドリシジミを筆頭に、ウラジロミドリシジミ、ジョウザンミドリシジミ、エゾミドリシジミ、ヒロオビミドリシジミ、ハヤシミドリシジミ等が6月上旬～7月中旬にかけてその姿をあらわすことが知られている。ヒロオビミドリシジミは県西部の佐用郡下に主な産地があることが知られており、岡山県との県境に散在するナラガシワ林にすみついている。この種類は、比較的最近になって、今までハヤシミドリシジミ等と混同して取り扱かわれていたものを、独立の種として分離されたもので、後翅裏面の白帯が他のどの種類よりも太い所からこの種名がつけられたようである。産地における個体数は決して少ない方ではないが